

# 城ノ越貝塚・岐宿貝塚から出土した貝類資料と年代測定 ——九州大学総合研究博物館収蔵資料を対象として——

福永 将大\*・伊藤 泰弘

九州大学総合研究博物館：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
\* fukunaga@museum.kyushu-u.ac.jp

**要旨**：九州大学総合研究博物館に所蔵されている、福岡県所在の城ノ越貝塚および長崎県所在の岐宿貝塚から出土した貝類資料の再検討を行った。出土した貝種の同定作業を行いつつ、合わせて出土貝類の生息域について再検討し、両遺跡における当時の周辺環境について考察した。また、両遺跡から出土した資料を対象に放射性炭素年代測定も実施した。

**キーワード**：九州大学総合研究博物館収蔵資料，資料報告，城ノ越貝塚，岐宿貝塚，弥生時代

## はじめに

九州大学総合研究博物館（以下、「当館」）には、鏡山猛氏が九州各地の遺跡で実施した発掘調査で出土した考古資料が収蔵されている。これら収蔵資料の中には、学史的に著名な遺跡・資料も含まれているが、そのほとんどは未報告であり、何らかの形で報告されていても概報的な性格にとどまっているものばかりである。こうした状況を少しでも改善すべく、著者のひとりである福永は、令和4（2022）年より当該資料の再整理・報告作業を行ってきた（福永2024）。本稿は、その再整理作業の過程で実施した、城ノ越貝塚・岐宿貝塚から出土した貝類資料の調査分析成果の一端について報告するものである。

本稿で対象とする城ノ越貝塚・岐宿貝塚から出土した貝類資料は、既に一部データが公表されている資料と考えられる<sup>1</sup>。どちらも資料は洗浄されており、出土層位や貝種ごとに袋分けした状態で収蔵されていた。各貝種の個体数などのデータはこれまで公表されていなかったこともあり、再度貝種の同定作業を実施して、その成果を報告することとした。合わせて出土貝類の生息域や生態について再検討し、両遺跡における貝類採集活動についても考察を試みる。また、城ノ越貝塚出土の貝類資料の一部と、岐宿貝塚で検出された竪穴住居跡から出土し

た炭化材に関して放射性炭素年代測定を実施した。その成果についても合わせて報告することとする。

以下、1・3を福永が、2を伊藤が執筆し、4については福永・伊藤で協議しつつ執筆した。

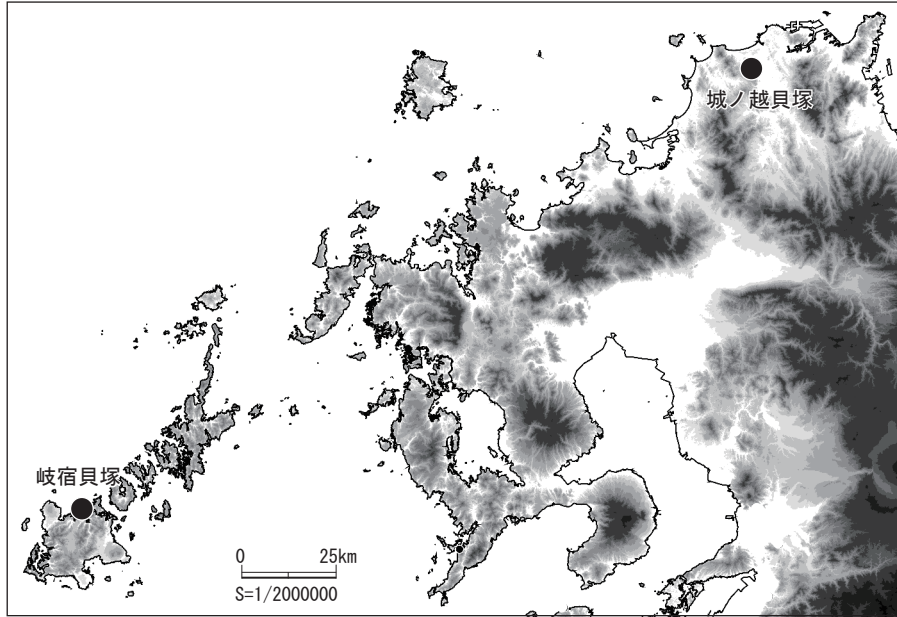
## 1. 城ノ越貝塚と岐宿貝塚について

まず、城ノ越貝塚と岐宿貝塚で検出されている貝層の状況をまとめて、対象とする貝類資料や、年代測定を行う炭化材資料の遺跡内での位置づけを明確にしておきたい。

### （1）城ノ越貝塚

福岡県遠賀郡遠賀町大字上別府に所在する（第1図）。遠賀川下流西岸の丘陵裾部に位置しており、弥生時代中期初頭に位置づけられる城ノ越式土器の標識遺跡である。

城ノ越貝塚は過去2回にわたって発掘調査がなされている。昭和27（1952）年に鏡山猛氏を調査主任として実施された第1次調査、昭和33（1958）年に杉原荘氏を調査主任として実施された第2次調査がそれである（第2図）。これらの発掘調査については、昭和36（1961）年に刊行された『日本農耕文化の生成』においてその成果



第1図 城ノ越貝塚と岐宿貝塚の位置

が報告されている（鏡山ほか1961）。当館に収蔵されている城ノ越貝塚の資料は、本稿で報告する貝類資料を含め、第1次調査で出土したものである。第1次調査の詳細と貝類資料を除く出土資料については、拙稿（2024）にて報告しているのでそちらをご参照願いたい。

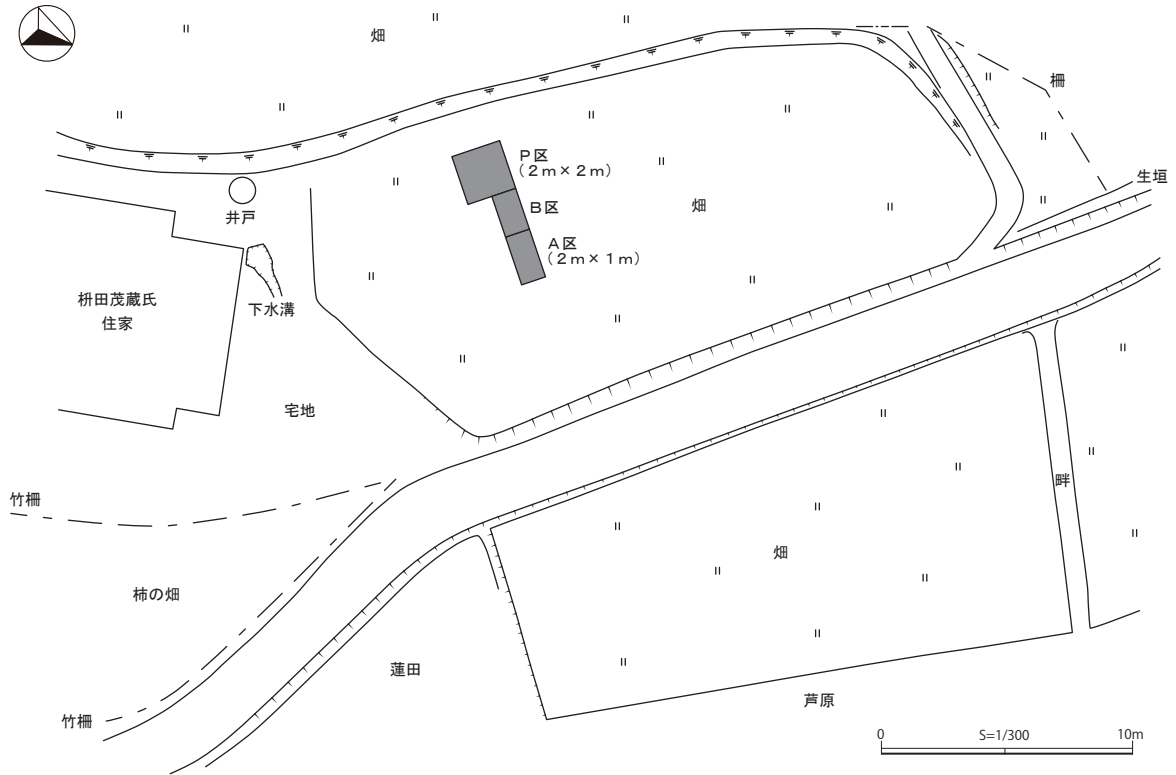
第3図は第1次調査の土層断面図である。図面中に「Shell」と記載はあるものの、残念ながら各層から出土した貝類の詳細を示す情報はない。第4図は『日本農耕文化の生成』に掲載されている土層図である。この図は第2次調査成果を踏まえたものであり、『日本農耕文化の生成』ではこの図をもとに貝類の層位的出土状況が報告されている（鏡山ほか1961）。先述の通り、本稿で報告する貝類資料は第1次調査で出土したものであり、第4図との対応関係は不明瞭ではあるものの、参考までに第4図各貝層から出土した貝類と土器に関する報告文の記述を要約したものを以下に記す。

- ① 基盤粘土層上の下部破碎貝層：ほとんどが淡水産のヤマトシジミ。城ノ越Ⅱ式土器を主体とするが、その下部に城ノ越Ⅰ式土器、上部には城ノ越Ⅲ式土器が混ざる。
- ② ①の上の混土貝層：鹹水産の貝類が増加。本層の下部ではハマグリ・カキ・ハイガイ・サルボウ・シオフキ・サザエ・ウミニナ・テングニシにヤマトシジミが混ざり、上部ではハマグリ・カキ・ハイガイ・サルボウ・ウミニナ・エボウミニナに少量のシジミ・

- タニシが加わる。③の純貝層を境界として上部と下部に分け、混土貝層下部は城ノ越Ⅲ式土器の古型式を主体とし、その下層部には城ノ越Ⅱ式土器を残す。混土貝層上部は城ノ越Ⅲ式土器の新型式を主体とする。
  - ③ ②に嵌入する純貝層：ヤマトシジミを主として、少量のハマグリが混ざる。
  - ④ ②の上部破碎貝層：カキを主体としてハマグリ・ハイガイ・サルボウ・ウミニナに少量のヤマトシジミが加わる。城ノ越Ⅳ式土器の古型式を包含している。
- なお、『日本農耕文化の生成』では、確認した層位状況と土器の新旧との間に明確な対応関係があると報告されており、そうした認識は第3図を見る限り、第1次調査の段階からあったものと推察される。しかし、第1次調査における層位状況と出土土器との関係を検討した結果、層位状況と土器の新旧が明確に対応するようなあり方を見出すことは困難であった（福永2024）。各貝層の時期比定については、考古学的検討からのアプローチのみでは限界がある。

## （2）岐宿貝塚

長崎県五島市岐宿町に所在しており（第1図）、「寄神貝塚」として県指定史跡に登録されている。城ノ越貝塚と同様、弥生時代の貝塚である。昭和37（1962）年8月17～30日に第1次調査、昭和38（1963）年8月1～13日に第2次調査が行われており、その調査成果は既に報告されてい

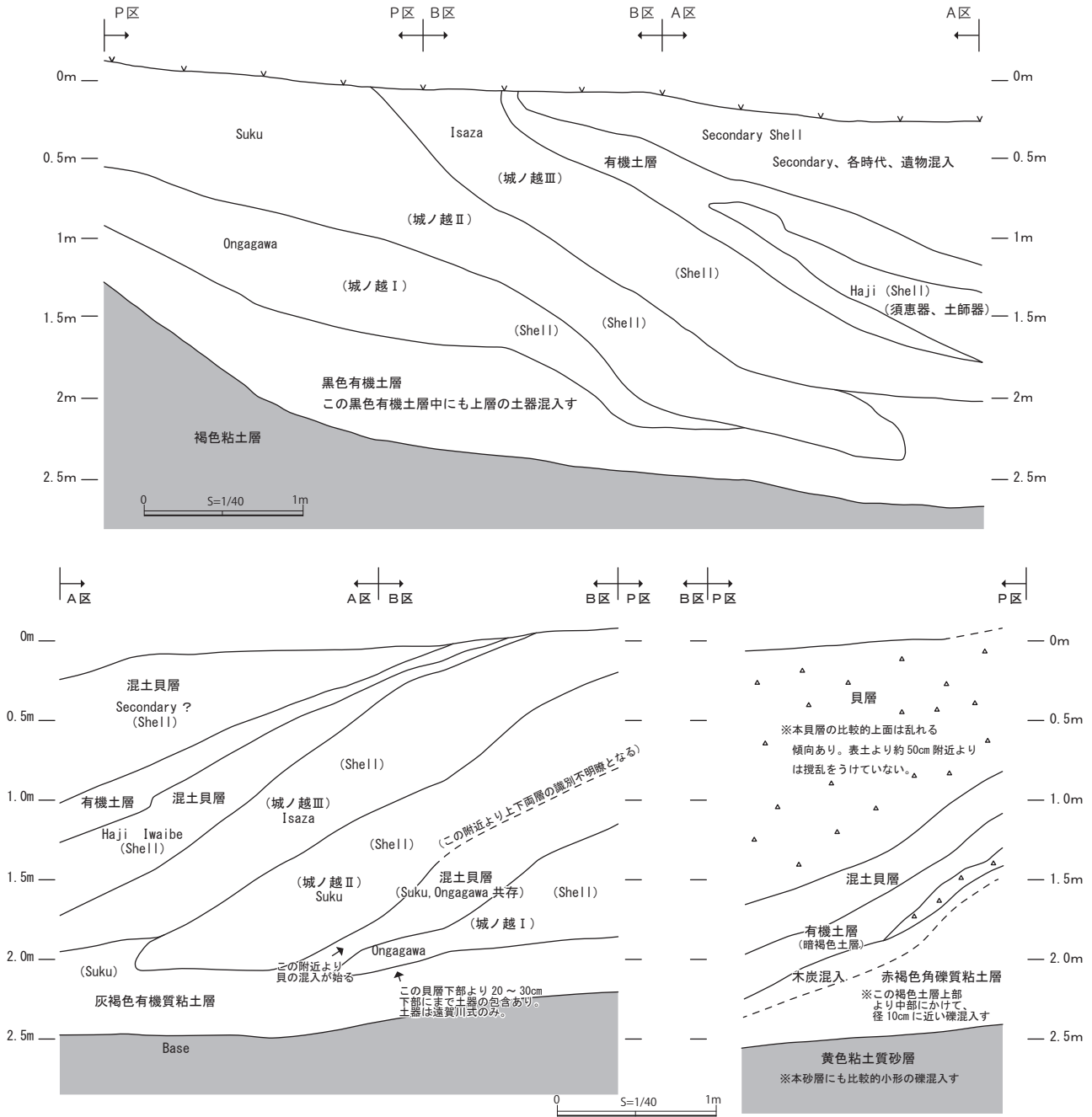


城ノ越貝塚第1次調査における調査区配置 (福永 2024 より転載)



城ノ越貝塚第2次調査における調査区配置 (日本考古学協会 (編) 1960 より転載、一部改変)

第2図 城ノ越貝塚のトレンチ配置図



第3図 城ノ越貝塚第1次調査の土層断面図

る(五島遺跡調査団1963;長崎県教育委員会1964)。

第1次調査・第2次調査を合わせて、全部で5か所のトレンチ調査がなされている(第5図)。Aトレンチ・Bトレンチは第1次調査、Cトレンチ・Dトレンチは第2次調査によるものである。各トレンチ調査成果から判明した基本層序は以下の通りである。

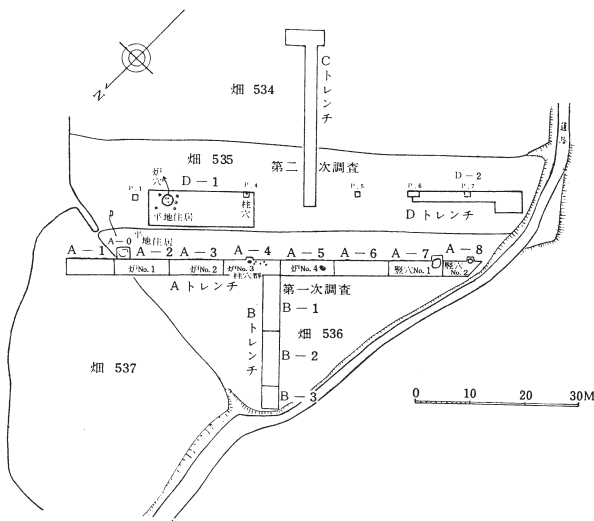
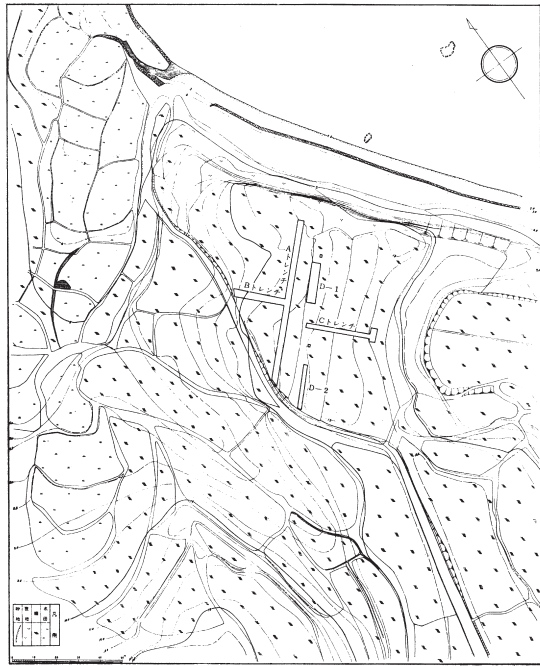
- 第I層：耕作土、攪乱土層。
- 第II層：灰黒色混貝粘土質土層。
- 第III層：灰黒色粘土層。

第IV層：暗褐色粘土層。

第V層：暗褐色含角礫(青灰色火山岩)粘土層。

第II層は耕作による攪乱を受けており、元来の遺物包含状況を示すのは第III層以下と報告されている。第III層については、各トレンチにおいて複雑な堆積状況を示しており、層の細分がなされている(第6図参照)。平地式住居跡・堅穴住居跡の住居跡が全部で10棟検出されているが、これらはすべて第III層で検出されている<sup>2</sup>。第V層は基盤層で、この層から遺物の出土は確認されてい





第5図 岐宿貝塚周辺の地形とトレンチ配置図

## 2. 収蔵貝類資料の検討

資料は、城ノ越貝塚および岐宿貝塚から出土した貝類である。資料の同定は、現生貝類図鑑(奥谷1986・2000・2017)および現生貝類標本との肉眼比較で行った。現生貝類標本として、九州大学総合研究博物館所蔵の佐藤勝義コレクションを利用した。貝類の学名・和名および生息環境は、奥谷(1986・2000・2017)を参考にした。

資料の係数は、腹足類(巻貝類)や掘足類において殻口部あるいは殻軸のあるものを1個体とし、二枚貝類においては左右のどちらかの殻頂部ないし概ね3分の2以上あるものを0.5個体とし、その総数を切り上げた。さら

に破片化したものが、多数ある場合は+を付記した。

城ノ越貝塚および岐宿貝塚から出土した貝類は、いずれも貝殻の溶脱が進行しており、破片化したものや同定不能な例が多く認められた。出土層位ごとに袋分けや貝殻への注記が施されていたが、判読困難なものも多数存在した。そのため、本研究における同定結果の一覧は層位別には区分せず、貝塚ごとに出土した総数を表として示す(第1表)。

### (1) 城ノ越貝塚

出土した貝類の大部分はシジミ類である。出土資料に含まれるシジミ類については、ヤマトシジミとマシジミの形態的判別が困難であり、両種が混在している可能性がある。そのため、本研究では両者を区別せず、総称としてシジミ類とした。ヤマトシジミは感潮域の河口や干潟の砂泥底に生息し汽水環境に適應する一方、マシジミは河川などの淡水域に生息するとされる。さらに、内湾の潮間帯に生息するハマグリやマガキも出土している。これらの状況から、当時は遠賀川河口あるいはそれよりやや上流域に特徴づけられるような環境に位置していたと考えられる。すなわち、汽水域または淡水域においてシジミ類を中心に採取し、併せて潮間帯に生息するハマグリやマガキも採取していたことが推測される。

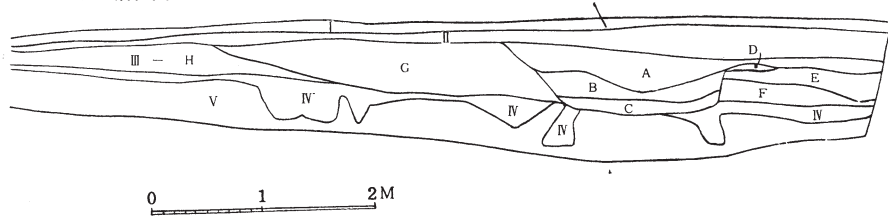
### (2) 岐宿貝塚

貝類の出土点数をみると、潮間帯の岩礁表面に生息するスガイが大部分を占め、レイシガイ、クボガイ、イシダタミなども含まれる。さらに、潮間帯の干潟や砂礫底などに生息するマガキも多数確認され、カキの殻表面に付着するウネナシトマガイも出土する。また、ウニの棘も含まれている。スガイなどは潮間帯において岩礁表面の海水に浸からない場所を好み、個体数が多いため採取が容易であったと考えられる。岩場のカキについても干潮時に容易に採取可能である。

## 3. 城ノ越貝塚・岐宿貝塚出土資料の年代測定

城ノ越貝塚出土の貝類資料2点と、岐宿貝塚で検出された竪穴住居跡から出土した炭化材4点<sup>3</sup>に関して放射性炭素年代測定を実施した<sup>4</sup>。第2表はその年代測定結

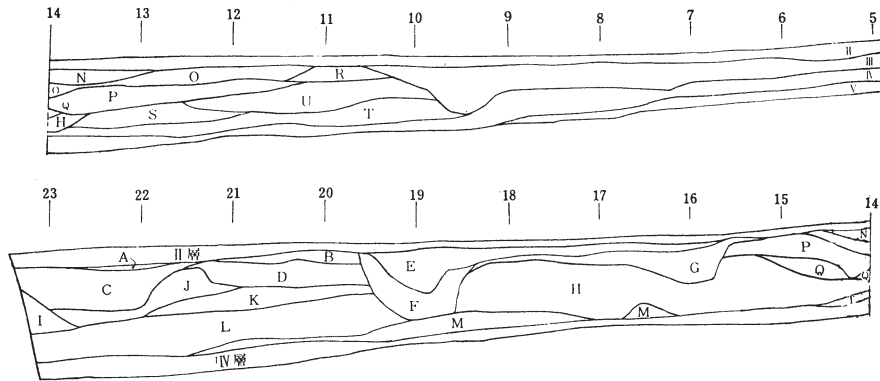
Aトレンチ 層位図



《Aトレンチ第Ⅲ層の分層》

- |                    |  |
|--------------------|--|
| A: 黒褐色、混貝、砂質       | E: 灰褐色、混貝、粘土質、ニナ極めて多し                  |
| B: 灰褐色、混貝、砂質       | F: 黒褐色、混貝（純貝層に近い）、粘土質、カキ極めて多し、多量の木炭を含む |
| C: 灰白色、粉碎貝、カルシウム沈殿 | G: 灰黒色、混貝、粘土質、ニナ極めて多し                  |
| D: 黒色、混貝、少量の木器を含む  | H: 暗褐色、混貝の率やや低し                        |

Bトレンチ 層位図



- 備考 1. 上欄の数字はAトレンチの分岐点よりの距離 (m)  
 2. 第I層（表土層）を除く 3. A～Uは第Ⅲ層

《Bトレンチ第Ⅲ層の分層》

- |                          |                                   |
|--------------------------|-----------------------------------|
| A: 黄褐色、混貝、砂質             | G: 暗褐色、混貝、粘土質、貝の混在率少し             |
| B: 暗褐色、混貝、粘土質            | H: 暗褐色、混貝、粘土質、弥生中期土器を含む           |
| C: 暗褐色、混貝、粘土質            | I: 暗褐色、混貝、粘土質、ニナ・カキの量多し、弥生中期土器を含む |
| D: 暗褐色、混貝量やや多し、粘土質       | J: 暗褐色、混貝、粘土質、カキ多し、多量の木炭粉末を含む     |
| E: 黄褐色、混貝、粘土質            | K: 暗褐色、混貝、粘土質                     |
| F: 暗褐色、混貝、ピットの底部が赤く焼けている | L: 純貝、殆ど混土なし                      |

第6図 岐宿貝塚A・Bトレンチ土層断面図

果を示したものである。

(1) 城ノ越貝塚

城ノ越貝塚の年代測定試料は、P区の2層とB区の9イ層からそれぞれ出土したものであり、いずれもハマグリである。P2層については調査日誌に記載があり、表土下-50cm~-90cmまでの堆積層を示すようだ(福永2024)。第3図を見ると「Ongagawa 城ノ越 I Shell」と「Suku 城ノ越 II Shell」と記載された堆積層が該当しうであるが、いずれの層は不明である。B9イ層に関しては調査日誌に記載はない。なお、層位状況と土器の新旧

が対応しないことは先述の通りであり、各層の考古学的時期の比定は困難である。

2σ 暦年代範囲(確率95.45%)に着目すると、P2層出土試料の年代測定値は611-211 cal BC (95.45%)、B9イ層出土試料は620-216 cal BC (95.45%)を示した。

(2) 岐宿貝塚

岐宿貝塚の年代測定試料は、A-7区で検出された竪穴住居跡から出土した炭化材と、同区のピット内から出土した炭化材で、各2点ずつの合計4点を分析した。いずれもラベルに「3'層」とあるが、住居跡などはすべて第

第1表 城ノ越貝塚・岐宿貝塚出土具類種名表

水深	底質	和名	分類	出土調査区・層位													合計							
				A1	A2	A3	A3?	A4	A4?	A5	A6	A3~A6	A7?	B3口	B12	B11		B10	P2	P2口	P3	P4	P9	不明6
河川・湖沼等(淡水) 感潮域・河口等(汽水)	砂泥底	シジミ類 マシジミ ヤマトシジミ	二枚貝綱	2	12	1	2	1	4	2	100	1	1	5+	2+	1	10	1				344	489+	
潮間帯	岩礁	カサガイ目の一種	腹足綱																					
潮間帯	岩礁	イシダタミ	腹足綱																					
潮間帯	岩礁	スガイ	腹足綱																			3	3	
潮間帯	岩礁	スガイ(フタ)	腹足綱																					
潮間帯~潮下帯	岩礁	レイシガイ	腹足綱																			1	1	
潮間帯~20 m	岩礁	クボガイ	腹足綱																			1	1	
潮間帯~20 m	岩礁	ハソアキクボガイ	腹足綱																			1	1	
潮間帯~20 m	岩礫底	ナミマガシワ	二枚貝綱					1																
潮間帯~20 m	岩礁	サザエ(殻)	腹足綱																					
潮間帯下部~20 m	岩礁	サザエ(フタ)	腹足綱					3	2	1	*	1				2				*		2	15+	
潮間帯~潮下帯(汽水)	砂礫・泥底	マガキ	二枚貝綱					2	2															
潮間帯	泥底・干潟	ウミニナ	腹足綱																				1	1
潮間帯	泥底	フトハナタリ	腹足綱																				3	3
潮間帯上部~20 m	砂泥底	サルボウ	二枚貝綱					1	1														1	1
潮間帯~10 m	泥底	ハイガイ	二枚貝綱					*															1	4+
潮間帯~20 m	岩礫	カリカネエガイ	二枚貝綱					1	1														1	4
潮間帯中部~下部	泥底	イボウミニナ	腹足綱							1													4	6
潮間帯下部~20 m	砂泥底	ハマグリ	二枚貝綱					1	2	1						*	*	1	1+	*		9	17+	
10~50 m	砂底	テングニシ	腹足綱																					

※「出土調査区・層位」として記載した内容は、各員資料に付されていたラベル記載内容に基づく。例えば、「A1」は「A区1層」、「不明6」は「調査区不明6層」を意味すると考えられる。

岐宿貝塚 出土具類種名表

水深	底質	和名	分類	出土調査区・層位													合計							
				A-7-3	A-8区3D層	A-8区3E層	A-8区3H層	B第0層	B第1層	B2第3層貝類	B E層	B F層	B G層	Bトレンチ層	Bトレンチ層	D層		難読不能						
河川・湖沼等(淡水) 感潮域・河口等(汽水)	砂泥底	シジミ類 マシジミ ヤマトシジミ	二枚貝綱																					
潮間帯	岩礁	カサガイ目の一種	腹足綱																					
潮間帯	岩礁	イシダタミ	腹足綱																					
潮間帯	岩礁	スガイ	腹足綱																					
潮間帯	岩礁	スガイ(フタ)	腹足綱																					
潮間帯~潮下帯	岩礁	レイシガイ	腹足綱																					
潮間帯~20 m	岩礁	クボガイ	腹足綱																					
潮間帯~20 m	岩礁	ハソアキクボガイ	腹足綱																					
潮間帯~20 m	岩礫底	ナミマガシワ	二枚貝綱																					
潮間帯~20 m	岩礁	サザエ(殻)	腹足綱																					
潮間帯下部~20 m	岩礁	サザエ(フタ)	腹足綱																					
潮間帯下部~20 m	岩礁	マガキ	二枚貝綱																					
潮間帯~潮下帯(汽水)	砂礫・泥底	ウミニナ	腹足綱																					
潮間帯	泥底・干潟	フトハナタリ	腹足綱																					
潮間帯上部~20 m	砂泥底	サルボウ	二枚貝綱																					
潮間帯~10 m	泥底	ハイガイ	二枚貝綱																					
潮間帯~20 m	岩礫	カリカネエガイ	二枚貝綱																					
潮間帯中部~下部	泥底	イボウミニナ	腹足綱																					
潮間帯下部~20 m	砂泥底	ハマグリ	二枚貝綱																					
10~50 m	砂底	テングニシ	腹足綱																					

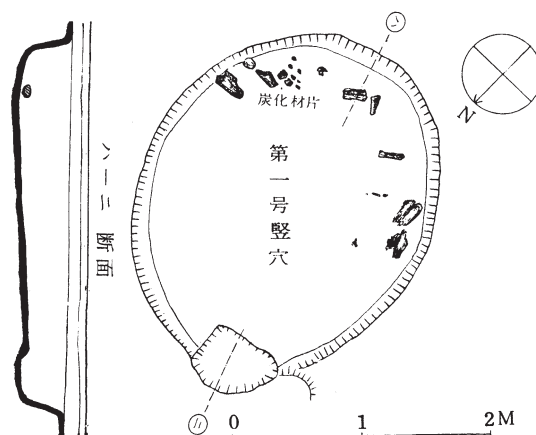
第2表 放射性炭素年代測定結果

資料番号	ラベル名	試料	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に校正した年代範囲	
						1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
試料No. 1	城ノ越 P2層	貝 (ハマグリ)	-1.26 $\pm$ 0.25	2559 $\pm$ 22	2560 $\pm$ 20	Marine data from Heaton et al (2020): (DeltaR=-240 $\pm$ 35 yr) 515-333 cal BC (68.27%)	Marine data from Heaton et al (2020): (DeltaR=-240 $\pm$ 35 yr) 611-211 cal BC (95.45%)
試料No. 2	城ノ越 B9イ層	貝 (ハマグリ)	-0.90 $\pm$ 0.25	2563 $\pm$ 21	2565 $\pm$ 20	Marine data from Heaton et al (2020): (DeltaR=-240 $\pm$ 35 yr) 517-337 cal BC (68.27%)	Marine data from Heaton et al (2020): (DeltaR=-240 $\pm$ 35 yr) 620-216 cal BC (95.45%)
試料No. 3	岐宿 A-7区 住居 址内 木炭 3'層 62.8.26	炭化材	-25.22 $\pm$ 0.18	376 $\pm$ 19	375 $\pm$ 20	1459-1501 cal AD (50.62%) 1600-1616 cal AD (17.65%)	1454-1522 cal AD (64.30%) 1577-1622 cal AD (31.15%)
試料No. 4	岐宿 A-7区 住居 址内 木炭 3'層 62.8.26	炭化材	-25.81 $\pm$ 0.23	335 $\pm$ 19	335 $\pm$ 20	1502-1526 cal AD (19.24%) 1554-1599 cal AD (35.62%) 1616-1633 cal AD (13.41%)	1483-1531 cal AD (29.15%) 1537-1636 cal AD (66.30%)
試料No. 5	岐宿 A-7区 3'層 (貝層) ピット 内 62.8.23	炭化材	-26.73 $\pm$ 0.19	362 $\pm$ 19	360 $\pm$ 20	1475-1514 cal AD (38.52%) 1590-1620 cal AD (29.75%)	1458-1524 cal AD (51.16%) 1559-1665 cal AD (1.37%) 1571-1631 cal AD (42.93%)
試料No. 6	岐宿 A-7区 3'層 (貝層) ピット 内 62.8.23	炭化材	-27.02 $\pm$ 0.22	378 $\pm$ 19	380 $\pm$ 20	1458-1499 cal AD (51.43%) 1600-1616 cal AD (16.83%)	1453-1521 cal AD (66.19%) 1578-1622 cal AD (29.26%)

III層から検出されたとの報告があり（長崎県教育委員会1964）、「3'層」は報告文の「第三層」と同義であろう。

A-7区で検出された竪穴住居跡は、報告書で住居下部構造第3類（一般的な竪穴住居）に分類された遺構である（長崎県教育委員会1964，第7図）。他に検出されている住居跡は平地式住居跡であり（報告書の住居下部構造第1類・第2類），第3類はこのA-7区で検出された1例のみとされている。長径3m，短径2.2mの楕円形プランを呈し，深さは約20cm程度。竪穴内には貝殻が詰まっており，床面は固く焼けしまっていたとされる。床面に横たわっていた炭化した木材は，建築部材の一部と考えられている。今回年代測定を行った試料は，おそらくこの炭化材であると推察される<sup>5</sup>。

竪穴住居跡出土試料2点の年代測定値は，1454-1522 cal AD (64.30%) および1577-1622 cal AD (31.15%) と，1483-1531 cal AD (29.15%) および1537-1636 cal AD (66.30%) で，いずれも中世後期～近世初期の年代を示す。報告書では，床面出土の土器はほとんどが弥生時代前期末の土器群（報告書のA式）だったとされており，竪穴住居跡の時期もその時期と報告されている（長崎県教育委員会1964）。



第7図 岐宿貝塚 A-7区竪穴住居跡

また，ピット出土試料2点の年代測定値は，1458-1524 cal AD (51.16%) および1571-1631 cal AD (42.93%) と，1453-1521 cal AD (66.19%) および1578-1622 cal AD (29.26%) で，こちらも竪穴住居跡出土炭化材と同様，中世後期～近世初期の年代を示す。竪穴住居跡およびピットの埋土中における炭化材の出土状況を精査できるデータ・記録は，残念ながら確認することはできない。これら炭化材の評価・位置づけは困難を極めるが，炭化材にラベリングされた情報が誤っていない限り，少なくとも

竪穴住居跡埋土、あるいはA-7区第Ⅲ層中に中世後期～近世初期の堆積物が混入していることは本分析結果からみて間違いなからう<sup>6</sup>。

#### 4. 若干の考察

城ノ越貝塚の収蔵貝類資料を検討した結果、おそらく従来ヤマトシジミと同定・報告されてきた資料の中に、マシジミが混在している可能性が高いことが判明した。両者は生息域が異なっており、ヤマトシジミは感潮域の河口や干潟の砂泥底に生息し汽水環境に適應する一方、マシジミは河川などの淡水域に生息するとされる。しかし、汽水域では両者が混在して生息することもあるようである。いずれにしても、当時の城ノ越貝塚は河口あるいはそれよりやや上流域に特徴づけられるような環境の周辺に位置しており、現在とは周辺環境が異なっていた可能性が指摘できる。

九州弥生時代貝塚を検討した齋藤瑞徳氏は、板付Ⅱ式期に海水準の上昇を伴う温暖化が生じており、それは伊勢・三河湾沿岸や東関東地域などの状況と連動した汎列島の現象と捉えるべきであるという指摘を行っている（齋藤2009）。第1次調査における層位状況と出土土器との関係については不明瞭な点が多いことは先述の通りであるが、第1表を見る限り、層の上下に対応して出土貝類が変動する様相も認められない。城ノ越貝塚の存続期間中、すなわち板付Ⅱa式期～須玖Ⅱ式期（福永2024）にかけては、概ね同様の環境が遺跡周辺に広がっていたことが推察される。

P2層出土ハマグリ<sup>7</sup>の年代測定値は611-211 cal BC (95.45%)、B9イ層出土ハマグリは620-216 cal BC (95.45%)を示した。値に幅があるものの、これらの年代値は上述した海水準の変動期との関係性を考える上で、今後重要な年代的定点となる可能性がある。

岐宿貝塚の収蔵貝類資料は、城ノ越貝塚とは異なる様相を呈することが明瞭となった。城ノ越貝塚で多く認められたシジミ類やハマグリなどは岐宿貝塚では出土しておらず、岩礁表面に生息するスガイなどが出土している。こうした出土貝類の差異は、両遺跡の立地環境の差異を反映していると考えられる。なお、岐宿貝塚の出土遺物に関しては、現在整理報告作業を進めているところであ

り、詳細は稿を改めて報告する予定であるが、出土土器の時期幅は城ノ越貝塚と概ね一致する傾向にあるという見通しを得ている。

岐宿貝塚で出土した炭化材の年代測定値は、いずれも中世後期～近世初期の年代を示すことがわかった。収蔵された遺物のほとんどは弥生時代の資料であるが、陶磁器の小片もごく少量確認している。今回分析した年代測定試料の評価、また、検出されている竪穴住居跡やピットの評価については、出土遺物の整理作業の結果を踏まえて、稿を改めて論じることとしたい。

#### 5. おわりに

九州大学総合研究博物館に所蔵されている、城ノ越貝塚・岐宿貝塚出土貝類を対象として、出土貝類の構成や想定される当時の遺跡周辺環境について検討した。また、城ノ越貝塚出土の貝類と岐宿貝塚出土の炭化材を対象として、放射性炭素年代測定を実施した。これらの分析によって今回新たな知見をいくつか得ることができ、資料の再整理・報告作業の意義を改めて感じた次第である。岐宿貝塚の年代測定値については意外な結果であったが、今後の出土遺物の整理作業を通して、その評価・位置づけを試みていきたい。

#### 註

- 1 発掘調査報告書など（鏡山ほか1961；長崎県教育委員会1964）における報告では貝類の個体数などは明記されておらず、当館に収蔵されている貝類資料が、既報の資料と一致しているかどうかの検証ができない。後述する資料の収蔵状況からは整理・報告作業を実施していたことが推察され、これら当館収蔵資料は各報告書などでデータ公表された資料である可能性が高いと考えられる。
- 2 岐宿貝塚における調査の詳細と出土土器・石器資料については、現在、整理報告作業を進めているところであり、稿を改めて成果報告する予定である。
- 3 岐宿貝塚も城ノ越貝塚と同様に、貝類資料を対象とした年代測定を行いたかったが、年代測定に適した良好な貝類資料がなく、炭化材を対象に分析を行うこととした。
- 4 年代測定は、株式会社パレオ・ラボに分析を依頼した。なお、暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20、海洋性試料についてはMarine20）を使用した。海洋性試料の14C年代は、海域ごとによりザラバ効果異なるため海域差が生

じる。したがって、より確かな年代を求めるためには、試料が生息していた海域における補正值 ( $\Delta R$ ) を用いて海域差を補正する必要がある。今回分析した城ノ越貝塚の貝類試料については、東名遺跡 (Nakamura et al., 2007) における値 ( $-125 \pm 50$  yr,  $-57 \pm 49$  yr,  $-45 \pm 49$  yr,  $-21 \pm 50$  yr,  $-42 \pm 50$  yr,  $-44 \pm 50$  yr,  $-86 \pm 48$  yr) を  $\Delta R$  計算サイト (<http://calib.org/JS/JSdeltar20/>) を用いて Marine20 に対応するよう再計算し、得られた値 ( $-307 \pm 55$  yr,  $-238 \pm 54$  yr,  $-226 \pm 54$  yr,  $-200 \pm 55$  yr,  $-221 \pm 55$  yr,  $-223 \pm 55$  yr,  $-265 \pm 53$  yr) を加重平均した  $\Delta R$  :  $-240 \pm 35$  yr を用いて暦年較正を行っている。

- 5 九州大学総合研究博物館には、岐宿貝塚の調査日誌や図面、報告書の原稿などが所蔵されている。年代測定を行った炭化材の由来や試料サンプリングの経緯を示す記録などを探したが、該当する資料は認められなかった。
- 6 株式会社パレオ・ラボに依頼して炭化材4点の樹種同定も実施した結果、いずれも針葉樹のマツ属複雑管束亜属であった。

## 引用文献

- 奥谷喬司 (編・監修) 1986 生物大図鑑・貝類：決定版, 世界文化社.
- 奥谷喬司 (編著) 2000 日本近海産貝類図鑑, 東海大学出版会.
- 奥谷喬司 (編著) 2017 日本近海産貝類図鑑 第二版, 東海大学出版部.
- 鏡山猛・杉原荘介・渡辺正気・大塚初重 1961 福岡県城ノ越遺跡. 日本考古学協会 (編), 日本農耕文化の生成 第一冊 本文篇. 株式会社東京堂, pp.89-109.
- 五島遺跡調査団 1963 長崎県五島福江島遺跡調査概報 (1962年度). 九州考古学17. 九州考古学会, pp.6-11.
- 齋藤瑞穂 2009 九州弥生時代貝塚の再検討. 平成21年度九州考古学会総会研究発表資料集. 九州考古学会, pp.11-20.
- 長崎県教育委員会 1964 昭和三十七年度・昭和三十八年度五島遺跡調査報告. 長崎県文化財報告書第2集
- 日本考古学協会 (編) 1960 日本農耕文化の生成 第二冊 図録篇. 株式会社東京堂
- 福永将大 2024 福岡県遠賀郡遠賀町所在城ノ越貝塚の第1次調査出土資料——九州大学総合研究博物館収蔵資料の研究——. 九州大学総合研究博物館研究報告21. 九州大学総合研究博物館, pp.17-51.
- 山本愛三 1964 貝類に関する考察. 長崎県教育委員会, 昭和三十七年度・昭和三十八年度五島遺跡調査報告. 長崎県文化財報告書第2集, pp.42-48.
- Nakamura, T., Nishida, I., Takada, H., Okuno, M., Minami, M. and Oda, H. (2007) Marine reservoir effect deduced from  $^{14}C$  dates on marine shells and terrestrial remains at archeological sites in Japan. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research section B: Beam Interactions with Materials and Atoms, 259, 453–459.

*Received Dec. 17, 2025; accepted Dec. 26, 2025*

# Shell Materials and Radiocarbon Dating from the Jonokoshi Shell Mound and Kishuku Shell Mound

—Focusing on materials held in the Kyushu University Museum—

Masahiro FUKUNAGA\*, Yasuhiro ITO

The Kyushu University Museum  
Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581 Japan  
\*fukunaga@museum.kyushu-u.ac.jp

We reexamined shell materials excavated from the Jonokoshi Shell Mound in Fukuoka Prefecture and the Kishuku Shell Mound in Nagasaki Prefecture, both housed in the Kyushu University Museum. We identified the species of the excavated shells and further examined the habitat range of the excavated shellfish, thereby considering the surrounding environment at both sites during that period. Radiocarbon dating was also conducted on materials excavated from both sites.

**Key words:** the Kyushu University Museum Collection, report of materials, Jonokoshi Shell Mound, Kishuku Shell Mound, Yayoi period